



▲(株)協和機械製作所で作られた除雪車。現在では本州からも注文がある

▲除雪車に取り付ける雪かき板の溶接作業

取材に訪れた日も、同社の工場では、除雪車の製作が行われていました。鉄工団地内の工場も年々オートメーション化が進んでおり、作業の大半はコンピュータ制御の工作機械で行われています。しかし、溶接や部品の組み立てなどの細かい作業は現在でも手作業が中心ということ、一生懸命溶接作業に励む従業員の姿が見られました。

この日、急ピッチで進んでいたのは、札幌ドームでの国際冬期道路会議(P・I・A・R・C)一月二十九日(三十一日)に出展するための大型除雪車の製作。この会議は世界十五カ国から二百四の企業が参加し、除雪に関する最先端の技術や製品を発表する場です。

「札幌の会社が金属加工や機械加工の分野で高い技術を持ち、優れた製品を作っていることは、地元でもあまり知られていないんですよ」と話すのは工場を案内してくれた代表取締役藤枝靖規さん。

「うち以外にも、発寒鉄工団地には、非常に高い技

術を持った企業が多く、たいがいのは地元で作れます。ただ、会社の規模の問題などもあり、道内で発注される大きい仕事のほとんどは本州の大手企業にとられてしまうんです。行政のみならず、道内の業界全体が地場の会社にもう少し目を向けてくれたらいいんですけどね」という藤枝さん。自らの技術力への自信と、技術を生かす場が少ない事への歯がゆさが言葉ににじんでいました。

発寒鉄工団地の「今」と「これから」

厳しい経済情勢の中、発寒鉄工団地は現在どのような状況にあり、どのような将来像を描いているのでしょうか。札幌鉄工団地協同組合の役員のみなさんにお話を伺いました。

「鉄工団地に限らず現在製造業は大きな岐路に立たされていると思います」と話すのは札幌鉄工団地協同組合の近藤英夫理事長です。

「今までの製造業は、地道に一生懸命やっていけば何とかなりましたが、公共

工事が減らされたり、海外の会社と競争をしなければならなくなったりしている今、それだけではやっていけません」と言う近藤理事長の言葉からは、団地が現在置かれている状況に対する危機感が伝わってきます。

ただ、団地の将来について悲観的な考えは持つていないようで「発寒鉄工団地は、常に時代と共に生きてきました。炭鉱離職者の雇用の受け皿になった時代もありましたし、オイルショックを経験して、共同の給油所を作ったりもしました。不況期には事業資金の融資制度を作ったりと、時代に合わせようまくやってきたんですよ」と自信をのぞかせます。

そして、今後、団地が進むべき方向については「それぞれの会社の特長を生かした高付加価値の製品を作ることや情報化社会に対応していくことが重要になるでしょう」と分析しています。

組合としても、発寒鉄工団地のホームページを立ち上げたり、IT関係の講習

会を実施したりと、情報化に対応するための取り組みも始めているとのこと。

また、ビジネスに結び付くさまざまな情報を組合から各企業に提供したり、個々の企業の情報を組合を通じて市場に発信したりして、新たなビジネスチャンスにつなげていくことも考えているようです。

「厳しい時代だとは思いますが、団地の中に優秀な若い人たちも育ってきていますし、大丈夫、立派にやっつけていくと思います」と笑顔で話す組合役員の皆さんの表情には、今まで幾多の不況期を知恵と努力で乗り越えてきたという自信があふれていました。(終)



▲札幌鉄工団地共同組合の役員の方皆さん。左から藤枝副理事長、近藤理事長、江良専務理事